



Memories

作 | 絵 · 岩岡琴弓



メモリーズ

作一絵 岩岡琴弓

僕の名前は優人。二十一歳。専門学生。
僕はお母さんに感謝を伝えられていない。
小さい頃からずっとそばにいてくれて、ずっと見守ってくれている
お母さん。感謝を伝えたくても照れ臭くてなかなか言い出せない。



そもそも僕がこう思い悩んでいるのは、弟のひなたが部活帰りにお母さんに伝えた「今日も送り迎えありがとう」という言葉からだった。

「ありがとう」ってなんだろうっ、「感謝」ってなんだろうっ。

普段気にしないようなことなのさ。

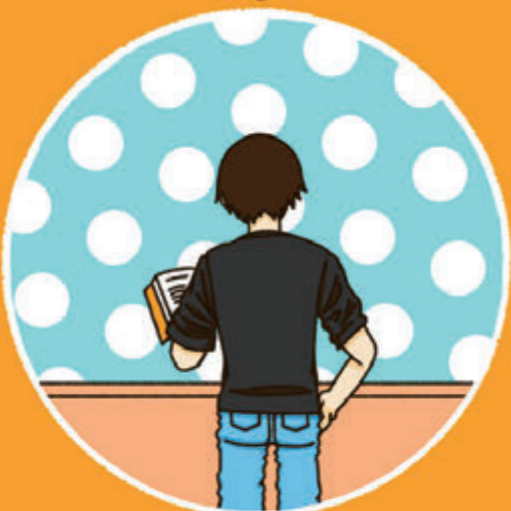
僕はそのことで頭がいっぱいになった。

でもまずは課題を進めなきゃ。考えるのは後じゃない。



「お兄ちゃん！お母さんが！早く！」
何かあったのだろうか。階段を降りると、お母さんが倒れていた。
「お母さん！お母さん！……しっかりして！」
「お母さん！うっ、うっ……」
「どっしり……」
思わぬ事態に、僕の頭の中は真っ白になった。ひなたは心配からか、
泣いていて動けないようだ。僕がなんとかしなきゃ。
まずは……電話。電話をしよう！落ち着いて行えば大丈夫。大丈夫。
大丈夫……





その後、お母さんは病院に運ばれた。後からお父さんも来て、お母さんは病気であることが発覚した。お母さんは入院し、お母さんがいない間、仕事で忙しいお父さんと、部活を頑張っているひなたの為に僕が料理を作ることになった。

三週間後、お母さんが家に帰ってきて、いつもの日常が戻ってきた。
「いただきますーすー」
夕飯の時間。ひなたの元気な声が響いた。
目の前にはほかほかのご飯とお味噌汁。野菜に、鮭に、きゅうりの漬物。デザートにはうさぎ型のりんご。僕の好きなものばかりだ。



「優人どうしたの？ポーンとしてないで食べなさいね。」
「うん、食べるよ。うただきます。」
…美味しい。口の中がいっぱい幸せが広がった。
きゅん、めいめい、きゅん、きゅん、ほ、きゅん、きゅんなんだ。



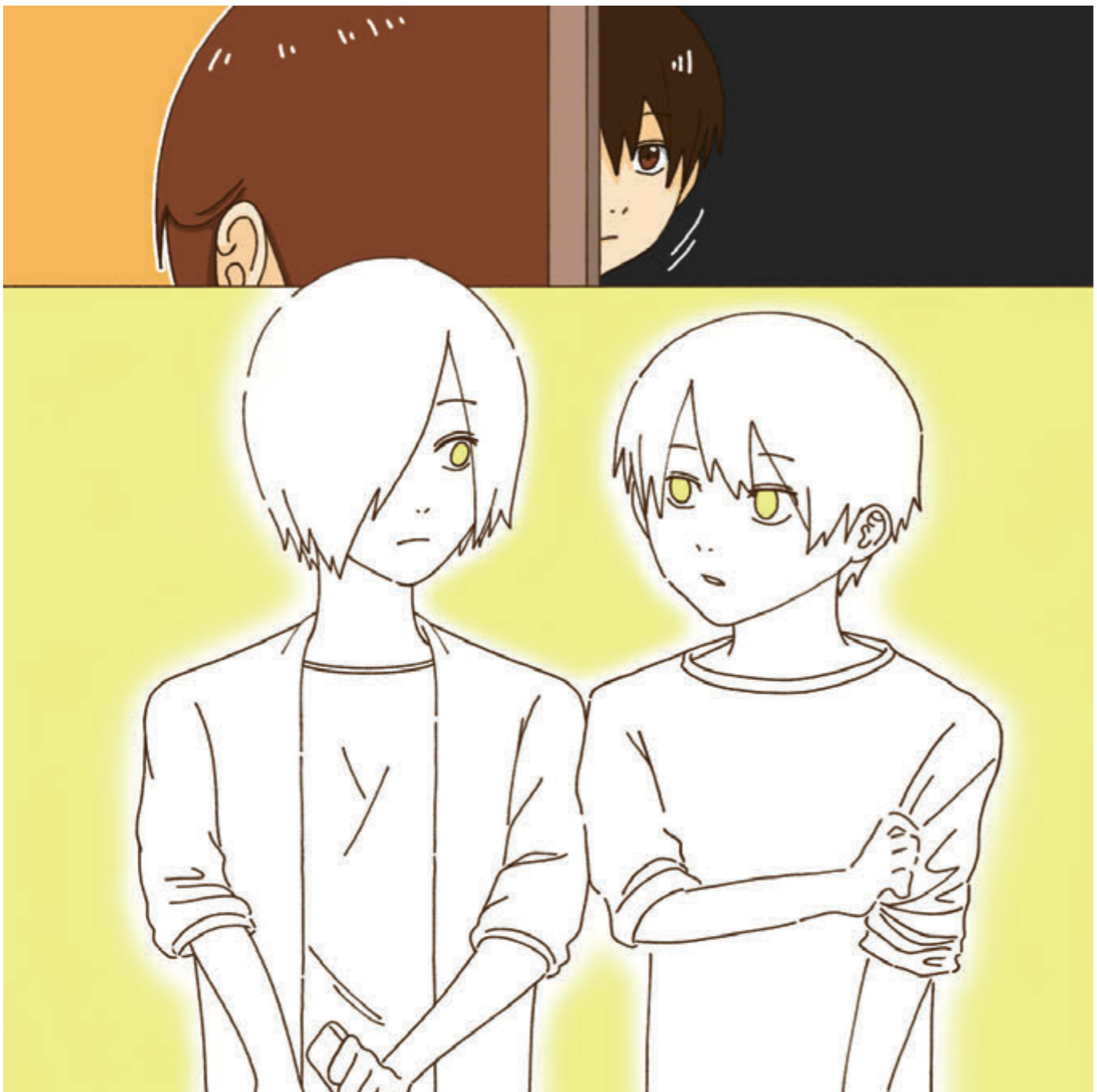
夕飯の時間が終わった。お母さんは洗い物をしている。
さっきの幸せが忘れられない。僕は思わずお母さんに声をかけた。

「僕がやる。何やったらいいっ!」

お母さんは驚いた顔で僕を見ていた。珍しい出来事にびっくりして
いるようだ。

「じゃあこれ、洗ったら乾燥機に入れて。」

「分かった。」



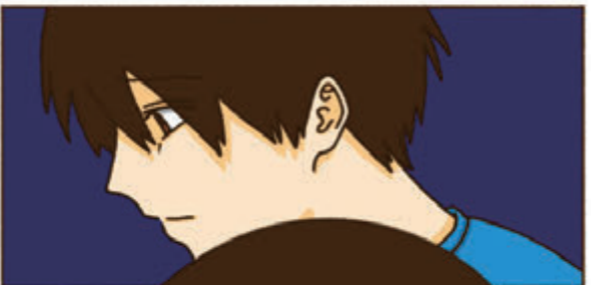
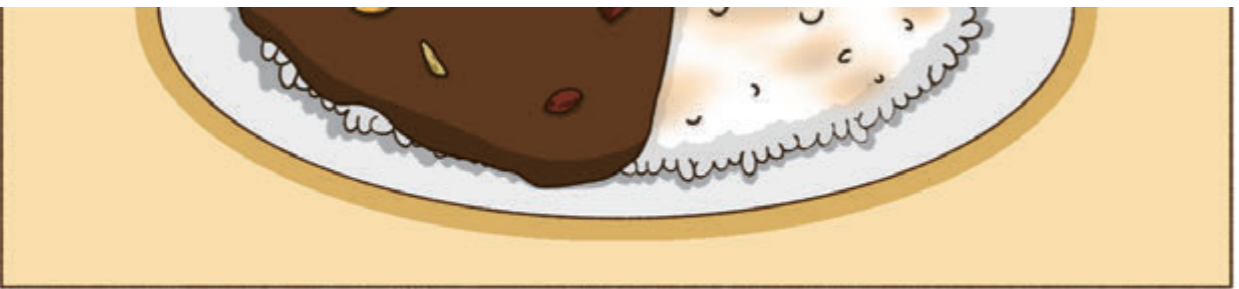


カチャカチャとお皿を洗う音だけが聞こえる。

「お手伝い、ありがとうね。」

「…」

お母さんからの感謝の言葉になんと返したらいいのか
分からなくなり、沈黙が続いた。



僕は黙ったまま、病気の治療で入院していたお母さんの代わりに、ご飯を作っていた時のことを思い出していた。初めは塩を入れすぎてしょっぱすぎたり、焦がしすぎて苦かったり。お母さんのように上手く作れなかった。作って食べては「お母さんの料理が食べたい」と思っていた。でも、ひなたとお父さんの「美味しい」「作ってくれてありがとう」という言葉に救われていた。心が温かくなった。

今日の夜食べた料理の口いっぱいに広がった幸せを思い出す。
お母さんは洗い物をしている僕の背中を眺めているようだ。
今、伝えるべきかもしれない。
また考えていて、このことを伝えられなくなったら……





「おかし〜。」
「何〜。」

「……………。」



少し間ができる。あれ？僕は今なんて言ったんだ？
「ふ、ごめんっ今の忘れてー」
恥ずかしさのあまり、僕は顔を真っ赤っかにしていた。
「忘れないわよ、嬉しい。いっしょいっしょもめいごとだね」
お母さんからの感謝の言葉に照れながらも微笑む。
「くっっ…」
僕は洗い物を続けた。

その夜、僕は布団に入って考えていた。
「ありがとう」
この言葉は心が温かくなる言葉だ。自分も、相手も。
これからは小さなことでも積極的に言っていこう。
あの時言えば良かったと後悔しないように。





お母さんへ
ありがとう。
優人



[Memories]

- ・発行日 : 2023年12月25日
- ・著者 : 岩岡 琴弓
- ・連絡先 : sdg-g21021@sist.ac.jp
- ・印刷会社 : 株式会社しまうまプリント